別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　森田　團

本論文は、20世紀前半のドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンの思考を〈媒質の哲学〉として解釈することを目的としている。

本論文は五部に分かれ、全十章によって構成されている。

第一部では、カント哲学へのベンヤミンの批判を通して媒質概念の必要性を導き出すことを試みる（第一章）。次に、その構成と狙いにおいて媒質概念と最も親縁性を持つと思われるカッシーラーのシンボル形式の概念との比較をおこなう（第二章）。

第二部ではベンヤミンの初期言語論の読解を通じて、媒質概念の構造と発生を明らかにし、さらに根源的産出という出来事を分析する。（第三章）。さらに初期言語論における命名の概念を分析し、ベンヤミンによる堕罪の言語論的な解釈が根源的産出の理論として読み得ることを示す（第四章）。

第三部では、ベンヤミンのイメージ論の前提となるクラーゲスのイメージ論を検討する（第五章）。次に、ベンヤミン自身のイメージ概念を、おもに「ゲーテの『親和力』」（1921/22）における「仮象」の概念に基づいて再構成する（第六章）。

第四部では、前期ベンヤミンにおいては文字が持つイメージを批判的に解体する可能性への認識が妨げられていることを指摘する（第七章）。しかし、この限界は、カフカ論において、文字の担う機能が神話的なものとの対決という主題のうちで考察されたことによって克服されることを示す（第八章）。

最終部である第五部は、根源的産出の過程と論理をミメーシスの概念の分析によって解明する。まず前期ベンヤミンのイメージとミメーシスについての思考を、「虹――ファンタジーについての対話」（1914/15）や『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』（1919）の最終章に見出し、改めて前期の思考の限界を探る（第九章）。後期のミメーシス論――すなわち「ミメーシスの概念について」と「類似したものについての理論」――の読解によって神話的なものとの対決の遂行の在り方が示される。イメージは根源的なミメーシスのうちで言語へと移行し、そのときミメーシスが行なう反復こそが移行の論理である（第十章）。

結論では、媒質の哲学と歴史哲学との本質的な関係を示し、ベンヤミンの歴史哲学の読解についての展望を提示する。

この論文の主要な主張は、以下のように要約される。

前期ベンヤミンの思考は、媒質を言語とみなす考え方に支配されているが、その背後には媒質をイメージと解釈するような考え方が存在する。それは、クラーゲスのイメージ論に関わる。後期ベンヤミンの思考の核心はイメージないしは神話的なものという問題との対決にある。同時に、文字と読むことの概念が、イメージという媒質を言語（線条的に展開される言説）へと転換する役割を果たす。1933 年から 1934 年のあいだに書かれた「ミメーシスの能

力について」と「フランツ・カフカ」において、媒質としてのイメージが根源的産出の過程で言説へと展開されていく過程が究明されている。これこそが〈神話的なものとの対決〉の具体的な内容であり、文字と読むことがイメージを言語へと転回させるにあたって、ミメーシスが重要な役割を果たす。

このように本論文は、詳細な読解に基づいた精緻かつ大がかりなベンヤミン論ではあるが、いくつかの欠点も無いわけではない。

まず、最初にベンヤミンの哲学を媒質の哲学と規定することから始まり、そこから展開された議論の到達点がやはり媒質がベンヤミンの始まりを形成する概念であるという全体の構造が、循環的構造を示しているという点。

次に、媒質を中心に議論を組み立てるためにやや強引な論理展開がみられること、とくにそのために歴史哲学に関する議論が排除されたこと。

さらに、議論は内部的には整合性を保っているものの、全体として何のためのものなのか、いかなる文脈に位置づけられるべき議論なのかが示されていないこと、などである。

しかし、若干の疑問はあるものの全体として優れた労作であることに変わりなく、慎重審議の結果、博士号に値するという結論に達した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。